（岩倉紙芝居館古典館<http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm>）　宰主　上田啓之

『荀子』議兵篇に、臨武君の言として「孫（子）・呉（子）も之（勢利、変詐、感忽、悠闇）を用いて、天下に敵無し」とあり、『韓非子』五蠧篇には、「孫・呉の書を蔵する者は、家ごとに之れ有り」、さりとて兵は弱いと嘆いており、戦国時代に広く普及していたとされる。司馬遷は「孫子・呉起列伝」を著し、呉王の闔閭（こうりょ、在位BC514-496）に仕えた斉人の孫武、その百年後の子孫、斉の田忌に仕えた孫臏の事績（桂陵の戦BC353、馬陵の戦BC341）、孔子の高弟の曾子の弟子であり、後に魏の文候（在位BC445-396）、武候（在位BC395-370）に仕えた衛人の呉岐の事績を記した。『漢書』芸文志・兵権謀家類には、『呉孫子兵法』82巻・図9巻、『漢書』30巻・志第10に「斉の孫子89編、図4巻」とあり、 顔師古がこれに「孫殯」と注 している。現テキストは13編であり、魏の曹操（武王）が編纂注した『魏武注孫子』による。
1972年、山東省銀雀山の前漢時代の墳墓から『竹簡孫子』や『孫殯兵法』の竹簡が出土し、『呉孫子兵法82巻・図9巻』と『斉の孫子（孫殯）89編、図4巻』は別物で、孫殯の兵法書は伝わっておらず、『呉孫子兵法』が継承されていることが判明したそうである。孫武の記したものが、後継者により82巻・図9巻に膨れあがり、曹操が基本となる部分に簡略化したとされる。続日本記、天平宝字四年（760年）十一月丙申条に、「舍人の春日部三関に刀を授け、中衛舍人土師宿禰関成等六人を大宰府に遣はし、大弐吉備朝臣真備に就かせ、諸葛亮八陳と孫子九地及び結営向背を習はしむ」とあり、「孫子」はこの時代から我が国でも読まれていた。

、、、、、、、、、、、、　孫子曰く、兵は国の大事(だいじ)、死生(しせい)の地、存亡(そんぼう)の道、察せざるべからず。故にこれを経(はかる)に五事(ごじ)をもってし、これを校(くらぶ)るに計(けい)をもってし、その情を索(もと)む。一に曰く道(みち)、二に曰く天(てん)、三に曰く地(ち)、四に曰く将(しょう)、五に曰く法(ほう)。
■校はjiào、比較、校訂すること。■道はdaò、dǎoでは導。■将はjiàng、軍事指揮官。■兵は兵器、兵士、軍隊、戦争であるが、国の大事とする。兵の死地と生地、国の存する道と亡ぶ道がある。■古来、「国の大事は祀と戎にあり」とされる。祀は祭祀、戎は戦争。祀を戎より重要視する。祀の行動様式が礼の規範となり、それは軍事行動をも拘束するものであった。祭祀には犠牲を以て祖神、祖先に供し、祭肉を分ける儀式（執膰）がある。軍が出征するには、祭肉を受ける儀式（受脤）がある。師とはその肉を携える者が原義とされる。その動作･禮義･威儀に敬がなくば、祖神、祖先の意と乖離し、兵はその力を尽くさず、その命（めい）を遂げる事は適わず、生きて帰ることもむつかしい、というような考え方があった。「国を守り、其の政令を行ひ、其の民を失ふこと無き所以は礼にあり」とする常識があった。

|  |
| --- |
| 春秋左氏伝、成公十三年（578BC）三月条に、「遂に劉康公･成肅公に從ひ、晉侯に會して秦を伐つ。成子脤（しん）を社に受く。不敬なり。劉子曰く、吾れ之を聞く、民は天地の中を受けて以て生ず。所謂命なり。是を以て動作･禮義･威儀の則有りて、以て命を定む。能者は之を養ひて以て福し、不能者は敗りて以て禍を取る。是の故に君子は禮を勤め、小人は力を盡くす。禮に勤むは敬を致すに如（し）くは莫（な）く、力を盡くすは敦篤に如くは莫し。敬は神を養ふに在り、篤は業を守るに在り。國の大事は、祀と戎とに在り。祀に膰（はん）を執ること有り、戎に脤を受くること有り。神の大節なり。今成子惰（おこた）る。其の命を棄てたり。其れ反（かへ）らざらんか、と」とある。昭公五年（537BC）春正月条に、「晉侯、女叔齊に謂ひて曰く、魯侯亦禮に善からずや、と。對へて曰く、魯侯焉ぞ禮を知らん、と。公曰く、何爲れぞ。郊勞（ねぎらひ）より贈賄に至るまで、禮に違ふもの無し。何の故に知らずとす、と。對へて曰く、是れ儀なり。禮と謂ふ可からず。禮は其の國を守り、其の政令を行ひ、其の民を失ふこと無き所以の者なり。今政令家に在れども、取ること能はず、子家羈（しかき；有能な人物）有れども、用ふること能はず、大國の盟を奸し、小國を陵虐し、人の難を利し、其の私を知らず、公室四分し、民のこと他に食すれども、思い公に在るもの莫く、其の終わりを圖らず、國君として、難將に身に及ばんとすれども、其の所を恤（うれ）へず。禮の本末は、將に此に在り。而るを屑屑焉（せつせつえん）として儀を習いて以て亟（すみ）やかにす。禮に善しと言うは、亦遠からずや、と（礼の本を忘れ末の儀ことを急務としているようなものと批判した）。君子謂えらく、叔侯是に禮を知れり、と。 |

■察、宀と祭からなる。宀は廟、廟中に祭って神意を伺うことが原義。経は、古くは、造営するに測量して南北を正すこと。五事によって国の大事（兵）を正しく経す。察すとは、廟中に於いて、計によって比較し、彼我の実情を探索すること、つまり、双方の国力を察すこととした。孫子は、「祀と戎」、「礼」といった観点ではなく、兵（国の大事）については、双方の国の五事（道、天、地、将、法）を察すべしとした。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、　道は、民をして上(かみ)と意(い)を同じくせしむ。故に、これと死すもよし、これと生くもよし、而して危(あやう)きを畏(おそ)れず。天は、陰陽(いんよう)・寒暑(かんしょ)・時制(じせい)なり。地は遠近(えんきん)・険易(けんい)・広狭(こうきょう)・死生(しせい)なり。将(しょう)は、智・信・仁・勇・厳なり。法は、曲制(きょくせい)・官道(かんどう)・主用(しゅよう)なり。およそこの五者は、将は聞かざることなきも、これを知る者は勝ち、知らざる者は勝たず。故にこれを校(くらぶ)に計をもってし、その情を索(もと)む。曰く、主いずれか有道なる、将いずれか有能なる、天地いずれか得たる、法令（ほうれい）いずれか行なわる、兵衆(へいしゅう)いずれか強き、士卒(しそつ)いずれか練(なら)いたる、賞罰(しょうばつ)いずれか明らかなる。吾これをもって勝負を知(し)る。
■道は上下心を一にし、生死を共にできること。道をdǎo（導）として解釈することもある。■甲骨文字は、地上の帝が上帝（天帝）の意向を占い、その行為を為した証であった。周は天命という考え方を導入し、革命を正当化し、天命を維持することの難しさを説き、易を用い転変に備えようとした。伝統的に、天、祖神、祖先の意をないがしろにする、あるいは背くならば、政権を失う、国の大事（兵）を過（あやま）るとした。伝統的には、卜占が易、天文、術数により精緻なものとなるが、天意が前提であり、人事は二の次であった。春秋時代には、兵法者の間に人事に重きをおく考え方が広まってきた。孫子は、更に明快に、天は陰陽、寒暑、時制という自然現象としたのであろう。しかし、宋刊十一家註孫子（以下十一家註）にみられるがごとく、陰陽、寒暑、時制について、多様な解釈を産んでおり、自然現象と割り切ることは困難なものがあった。■地は地形、地勢。■将は資質、器量、五徳を備えること。■魏武帝註孫子では、「曲制なるは、部曲・旗幟（はたのぼり）・金鼓の制なり。官なるは、百官の分なり。道なるは糧路なり。主用なるは、主たる軍費用なり」とあり、軍の統制、軍の組織、兵站、軍備軍費に関するものとされるが、「十一家註」にみられるように、曲制・官道・主用の定釈はない。曲は部隊編成で、五人を伍とし、十伍（50人）を隊とし、二隊（100人）を曲とする説がある。制は切り揃えること。軍は行動を統制するべし（曲制）。諸将諸兵の力任せで無く、命令系統を確立すべし（官道）。作戦における主力部隊、それぞれ役割を持つ部隊の分担を明確にし、その功罪に応じ、必ず賞罰すべし（主用）と釈してみた。■将は五事のことを聞くが、その事を知る者は勝ち、知らない者は勝てない。■校jiào　比較する／校訂する。■計は概算、策略、打算であり、計算することでもある。ここでは、五事を比較するための指標のごときもので、ランク付けあるいは数値化して、実勢を図式化するがごとし。■主は君主。どちらの君主が君臣心を一にしているか。「十一家註」においては項羽と劉邦の比較に於いて論じられる。■どちらの将が五徳を呈するか。■天の時、地の利を得ていか。■法が敷かれ、令が貫徹されているか。■兵士と兵器の軍団の力はどうか。■士卒の訓練度はどうか。■功ある者を賞し、過ちある者を罰しているか。この七つを比べ計れば、その勝負を読むことができる。
■「故可以與之死、可以與之生、而不畏危」は竹簡本では「故可與之死、可與之生、而不詭；故にこれと與に死すべし、これと與に生くべし、而して詭（あざむ）かず」とされる。

、、、、、、、、、　将(しょう)わが計(けい)を聴き、これを用（もち）うれば必ず勝つ。これを留（とど）めん。将(しょう)わが計(けい)を聴かずんば、これを用うれど必ず敗（やぶ）る。これを去らん。計(けい)利、以て聴かるれば、すなわちこれに勢(せい)をなし、以てその外(そと)を佐(たす)く。勢(せい)は利によりて権(けん)を制(せい)すなり。
■将jiàng　将軍　これまで比較の対象が「主」であり、将は主の考慮する一要素であった。これを「主」の「将」とするか、「主」そのものを「将」とするか、また、之を「吾計」とするか「将」とするかで解釈が異なる。「十一家註」においては、孫武が吳王闔閭に対して記した言葉としており、吳王闔閭が自ら将であったことにより、主（吳王）と将（闔閭）とを同一としている。■聴は聴き容れる、理解すること。将（主）が吾計を採用し、吾計を用いれば必ず勝つ。私（孫武）は（軍師として）ここに留まる。吾計に耳をかさずば必ず敗れる。私はここを去るとなる。将はjiāngで、まさに～せんとす。「主よ」まさに吾計を採用し、吾計を用いば必ず勝たんとす、ともなる。■（主の）将軍が吾計を採用するなら、この将軍を用いれば必ず勝つ。この将軍を留任しなさい。吾計に耳をかさずば必ず敗れる。任を解きなさい、ともなる。「將聽吾計、用之必勝、留之、將不聽吾計、用之必敗、去之」を省くテキストもある。■吾が計の利がご理解いただけるなら、これを勢として、外から活用しましょう。「十一家註」では、其外を常法の外とし、次の詭道を予想させるものとみていよう。■権は権変、その場に応じて適切な手段をとること。臨機応変。因はある状況に身を置くこと。その外部状況をとりこみ、勢は利に就くことによって、刻々変化するものをコントロールする。

、、、、、、、、、、、、、、、、 兵は詭道(きどう)なり。故に能(のう)なるもこれに不能を示し、用(よう)なるもこれに不用を示し、近くともこれに遠きを示し、遠くともこれに近きを示し、利(り)にしてこれを誘い、乱(らん)にしてこれを取り、実(じつ)にしてこれに備え、強(きょう)にしてこれを避け、怒(ど)にしてこれを撓(みだ)し、卑(ひ)にしてこれを驕(おご)らせ、佚(いつ)にしてこれを労し、親(しん)にしてこれを離す。その無備(むび)を攻め、その不意に出(い)ず。これ兵家の勢(せい)、先(さき)には伝うべからざるなり。
■詭は、相手を欺（あざむ）くとされがちである。古く、詩、大雅、民労に、「詭随（きずゐ）を縦（ほしいまま）にすること無く、以て無良を謹（とど）めよ」とあり、詭随とは人の言に盲従することであった。説文には、「責なり」とあり、「変なり」、「違なり」とする異文がある（字統）としており、孫子により独自の意味が付与されたのであろう。「詭は是れ千变万化の意思、其の不意に出ず意思。道の原意は是れ途径、引申して方法と計謀と為す（百度百科）」とあり、詭は、先の権（変）を受け、事態の千変万化に柔軟に対応（盲従的意味の延長）し、自ら千変万化して相手の不意を突くことで、詭道はその方法となろう。■能而示之不能　能を不能にみせかける。■用而示之不用　用（必要とすること）を不用にみせかける。■近而示之遠、遠而示之近　近辺に居ることを遠方にいるとみせかける、又、その逆。■利而誘之　相手が利（で動く）ならば利で誘え。■亂而取之　（利で釣り）相手の結束を乱し、分断し、奪い取れ。■實而備之　相手に実力があれば備えよ。その逆が、攻其無備　備え無き相手を攻めよ。■強而避之　相手が強ければ避けよ。■怒而撓之　撓は「たわむ」「みだす」「かがむ」「つめなどでひっかく」こと。相手が怒り猛るなら撹乱せよと釈される、ひっかいてますますカッカさせ相手の自制心を失わせることか。肩すかしを喰らわせるということもあろう。■卑而驕之　卑は「へりくだる」こと。へりくだる相手はほめ殺せ（増長させ油断させよ）。■佚而勞之　佚yìは安楽にふけること。安楽にする相手は疲労させよと釈される。勞はわずらわせること。佚は自分を失っていることであり、自分を見失う相手には（誤報を流してその心を）煩わせよ。■親而離之親は説文に「至るなり」とあり、注に、「情意懇に到るを至と曰ふ」とあり、君臣、将兵間の情意懇に到るものがあること。（寝返り、内通等の風評を流し）疑念を植え付けよ。■出其不意　相手の裏をかく、意表を突く。不意は相手の意にないところ。■此兵家之勢　宋本では「勢」ではなく「勝」とある。武内義雄「孫子考文」にしたがい改めたと注される。これは、詭道の説明であり、勝のままでよいと思われる。当方の方針が前もって相手に伝わることは避けなければならない（相手の諜報活動に留意せよ）。伝わるなら偽の情報を伝えよ。

、。、。、、。、　それいまだ戦わずして廟算（びょうさん）して勝つは、算（さん）を得ること多し。いまだ戦わずして廟算（びょうさん）して勝たざるは、算（さん）を得ること少きなり。算（さん）多きは勝ち、算（さん）少なきは勝たず。しかるをいわんや算（さん）なきにおいてをや。われこれをもってこれを観（み）るに、勝負見（あら）わる。
■筭　古くは算と同じ。説文に、「長六寸。歷數を計るもの」とある。廟算は宗廟における戦う前に行う作戦会議のごときもの。五事（道、天、地、将、法）について、戦う前に、彼我の得失を十分に計算し、勝算の多少を明らかにする。■無筭　廟算せずして、戦うこと。廟算無き戦は、将間、将兵間の意思統一なきもので、五事の第一である「道（令民與上同意）」に背く暴挙である。■見xiànは現。よく廟算すれば戦う前に、勝ち負けはそこに現れる。

了　2017年6月5日

**宋刊十一家註孫子**（[HP](http://www.cos.url.tw/sunzi/10man.htm)）（注釈者のプロフィールについては、古典ぱん（[HP](https://k10p.net/?p=1253)）に詳しい）

曹操（そうそう155～220）曰く、計とは、將を選び、敵を量り、地を度（はか）り、卒を料（はか）り、遠近、險易を廟堂に於て計ることなり。
李筌（りせん713～741）曰く、計とは、兵の上なり。『太一遁甲\*』に、「先す計を以て神を德宮に加う。以て主客の成敗（成功失敗）を斷ず」とある。故に孫子兵を論ずに、亦、以て計を篇首と為す。
杜牧（とぼく803～852）曰く、計は算なり。曰く、何事を計算す？曰く、下の五事、所謂道、天、地、將、法なり。廟堂の上に於て、先ず以て彼我の五事の優劣を計算し、然る後に勝負を定む。勝負既に定れば、然る後に師を興し、衆を動す。用兵の道は、此の五事に先んずこと莫し。故に著篇の首と為すのみ。
王晳（おうせき、宋）曰く、計とは、主將、天地、法令、兵衆、士卒、賞罰を計すを謂う。
張預（ちょうよ、宋）曰く、『管子（[中國哲學書電子化計劃](http://ctext.org/guanzi/zh)）（[『菅子』と『呂氏春秋』](http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/handle/2324/18065/ctr007_p001.pdf)、町田三郎）』に曰く、「計は先に內に定む。而して後に兵を境に出す」。故に用兵の道は、以て計を首と為す。或に曰く、兵は敵に臨みて宜を制すを貴とす。曹公、「廟堂に於て計す」と謂ふは、何ぞ？曰く、將の賢愚、敵の強弱、地の遠近、兵の衆寡、安んぞ得て先にこれを計せずか？兩軍相い臨むに及びてや、變動し相應ず。則ち將の所裁（采配）に在り。度を隃（こえ）る可くも非ず（戦場では采配、事前の計無くしてどう采配できよう）。
\*「太一の式盤は、1977年に中国の安徽省阜陽県の前漢汝陰侯墓から「太一九宮盤」「六壬盤」「円儀」の三つの儀器が出土されており、当時の太一は『隋書経籍志（五行部）』に記載さ れた『太一九宮式經』がある。また『五行大義』の中にも記述が残されており、『太乙金鏡 式經十巻（唐王希明撰）』は、唐時代の太乙を伝える一般の資料である。太乙は本来、天を占うものと地を占う太乙があったようだ。天占の太乙は、円形の天を表す式盤を造り、地占の太乙は、都天太乙とも呼ばれ、大地を表す四角形の魔方陣の式盤を 作成する。これは中国大陸の洛陽（黄土）という古代の都を中心にして九つに分けたもので、太一雷公式九宮法とも呼ばれている。つまり、雷公式は遁甲式を指すものであり、後の奇門遁甲に発展して呼び方が改められたようである。太乙はその地方によって太一や太 乙と呼ばれでいる（[あるがままの占いの教え](http://ato.five-arts.com/5jutsu.pdf)、古代中国の運命学の伝統と叡智、阿藤 大昇著）。」

（孫子曰：兵者，國之大事，）
杜牧曰く、『傳』に曰く、「國の大事は、祀と戎とに在り」。
張預曰く、國の安危は兵に在り。故に、講武練兵は、實（まこと）に先務なり。

（死生之地，存亡之道，不可不察也。）
李筌曰く、兵は凶器、死生、存亡は此に繫る。是以てこれを重きとし、人、輕く行う者を恐る。
杜牧曰く、國の存亡、人の死生、皆兵に由る。故に審ひらかに察すべし。
賈林（かりん、宋）曰く、地は猶所なり、亦、陳師（布陣）、振旅（整軍）、戰陳の地を謂う。其の利を得れば則ち生き、其の便を失えば則ち死す。故に死生の地と曰う。道は、機を權（はか）り勝を立つ道。これを得れば則ち存し、これを失えば則ち亡ぶ。故に察せざるべからずと曰く。『書』に曰く、「存す道有る者は、固（堅固）を輔（たす）け、亡ぶ道有る者は、亡（滅亡）を推（お）す」。
梅堯臣（ばいぎょうしん1002～1060）曰く、地に死生の勢有り。戰に存亡の道有り。
王晳曰く、兵舉げれば、則ち死生、存亡これに繫る。
張預曰く、民の死生は此に兆（きざ）す。則ち國の存亡は彼に見（あらわ）る。然り、死生を地と曰い、存亡を道と曰うは、以て死生は勝負の地に在り、而して存亡は得失の道に繫る。得て重く慎しみて審ひらかに察せざるや？

（故經之以五事，校之以計，而索其情：）
曹操曰く、下五事七計を謂う。彼我の情を求む。
李筌曰く、下五事を謂う。校は量なり。遠近を量計す、而して物情を求め以て敵に應ず。
杜牧曰く、經は經度なり。五者は即ち下の所謂五事なり。校は校量なり。計は即ち篇首の計算なり。索は搜索なり。情は彼我の情なり。此れ言うは、先ず須（す）べきは五事の優劣を經度し、次に復た計算の得失を校量し、然る後に彼我勝負の情狀を搜索始む可し。
賈林曰く、彼我の計謀を校量す。兩軍の情實を搜索す。則ち長短知る可し。勝負は見ること易し。
梅堯臣曰く、五事を經紀し、計利を校定す。
王晳曰く、經は常なり、又經緯なり。計は下七計を謂う。索は盡なり。兵の大經、道、天、地、將、法を出でざるのみ。就而（とりわけ）これを校（かむが）うに七計を以てし、然る後に能く彼己勝負の情狀を盡す。
張預曰く、經は經緯なり。上は先ず五事の次序を經緯す。下は乃ち五事を用い以て彼我の優劣を校計し、勝負の情狀を探索す。

（一曰道，）
張預曰く、恩信（恩徳真義）にして民を使う。

（二曰天，）
張預曰く、上は天の時に順う。

（三曰地，）
張預曰く、下は地の利を知る。

（四曰將，）
張預曰く、賢能に委任す。

（五曰法，）
杜牧曰く、此れ之、五事を謂う。
王晳曰く、此れ之五事を經す。夫れ用兵の道、人の和本と為し、天の時と地の利則ち其れ助く。三者が具わり、然る後に舉兵を議す。兵舉ぐれば、必ず能を將と須（す）べし。能を將とし然る後に法が修まる。孫子の次（順序）とする所、此れ之を謂う。
張預曰く、節制嚴明は、夫れ將と法。五事の末に在るは、凡そ兵を舉げ罪を伐つ、廟堂の上に、先ず恩信の厚薄を察し、後に天時の逆順を度（はか）り、次に地形の險易を審ひらかにし、三つの者已に熟し、然る後に將に命じこれを征す。兵既に境を出ずれば、則ち法令一に將に從う。此れ其の次序なり。

（道者，令民與上同意也，）
張預曰く、恩信道義を以て衆を撫（な）で、則ち三軍心を一にせば、樂、其の用を為す。『易』に曰く、「說（よろこ）びて以て難を犯せば、民其の死を忘る」。

（故可以與之死，可以與之生，而不畏危。）
曹操曰く、之を道（みちび）くに教令を以てすを謂う。危は、危疑なり（疑いあることが危うい）。
李筌曰く、危は亡なり。道を以て衆を理せば、人自ら之に化す。其れ得て同じく用いば、何ぞ之を亡うこと有りや！
杜牧曰く、道は仁義なり。李斯、荀卿に兵を問う。答えて曰く、「彼の仁義は、政を修む所以なる者なり。政修めば則ち民其の上（かみ）に親しむ。其の君を樂しみ、之が為に死すこと輕し」。復た趙の孝成王が兵を論ずに對えて曰く、「百將心を一にし、三軍力を同じくす。臣の君に於るや、下（しも）の上（かみ）に於けるなり。子の父に事（つか）え、弟の兄に事えるが若（ごと）し。手臂が頭を捍（ふせ）ぎ、目が胸臆（胸の内）を覆うが若きなり」。此の如くせば、始めて上と下と意を同じくし、死生致るを同じくし、危疑に畏懼せざらしむべし。
陳皥（ちんこう、唐）註すこと杜牧と同じ。
孟氏曰く、一（ある）に「人不疑」に作る。始終二志無きことを謂う。一に「人不危」に作る。道は、之を道くに政令を以てすを謂う。之を齊（ととの）うに禮教を以てす。故に、能く士民を化し服し、上と下と心を同じくす。故に、用兵の妙、權術を以て道と為す。大道廢（すた）れて法有り、法廢れて權有り、權廢れて勢有り、勢廢れて術有り、術廢れて數有り。大道淪（しず）み替（かわ）り、人情訛（なま）り偽（いつわ）る。權數を以てこれを取るに非ず。則ち其の欲を得ず。故に、其の權術の道、民をして上下同じく進み趨（はし）り、共に愛憎し、利害を一にす。故に、人心德に歸し、人の力を得、無私の至なり。故に、百萬の衆、其の心一の如し。與に俱に死を同じくし力動（はたらか）すべし、而して危亡に至らず。臣の君に於る、下の上に於ける、子の父に事え、弟の兄に事えるが若し、手臂の頭を捍（ふせ）ぎ、目が胸臆（胸の内）を覆うが若きなり。此の如くせば、始めて上と下と意を同じくし、死生致るを同じくし、危疑に畏懼せざらしむべし。
賈林曰く、將に能く道を以て心と為す。人に同じく利を與え共に患えば、則ち士卒服す。自ら然り、心は上者と同じなり。士卒をして我が父母の如く懷（おも）わしめ、敵を視ること仇讎の如くならば、道能わざること非ず。黃石公（秦末の隠士。張良はこの老人から授けられた兵書を読み、漢の高祖の天下平定を助けたという）云く、「道を得るは昌（さか）え、道を失うは亡（ほろ）ぶ」。
杜佑曰く、之を導くに政令を以てし、之を齊うに禮教以てすを謂う。危は疑なり。上に仁有りて施せば、下能く命を致す。故に與に存亡の難に處し、傾危の敗を畏れず。晉陽の圍、沈灶產蛙（灶「かまど」が水底に沈み、蛙が生まれる。水患の甚しきを形容す）の若きも、人叛き疑心すること無し。
梅堯臣曰く、危は戾なり。主に道有れば、則ち政教行わる。人心同じくせば、則ち危戾去る。故に主安じて安を與え、主危にして危を與う。
王晳曰く、道は主に道有れば、能く民心を得るを謂う。夫れ民の心を得れば、死力を得る所以、死力を得れば、患難を濟（すく）う所以。『易』に曰く、「悅は以て難を犯す、民は其の死を忘る」。是の如くせば、則ち安んぞ危難の事を畏れんか？
張預曰く、危は疑なり。士卒恩に感じ、死生存亡、上と之同じくし、決然として疑懼する所無し。

（天者，陰陽、寒暑、時制也。）
曹操曰く、天に順いて誅を行う。陰陽四時の制に因る。故に『司馬法（「司馬穰苴の撰」、斉・威王(在位BC356～前320年)の後年に成立）[漢文大系](https://kanbun.info/shibu02/shiba00.html)』に曰く、「冬夏に師を興さずは、民を兼愛す所以」。
李筌曰く、天に應じ人に順い、時に因りて敵を制す。
杜牧曰く、陰陽は、五行、刑德、向背の類、是なり。今五緯（金星、木星、水星、火星、土星）行止す、最も驗（しるし）と據（よ）る可し。巫咸、甘氏、石氏、唐蒙、史墨、梓慎、稗竈の徒、皆著述有り。咸（みな）祕奧を稱し、其の指歸を察し、皆人事を本とす。『準星經』に曰く、「歲星（木星）所在の分、攻む可からず。之を攻めば反りて其の殃を受く」。『左傳』昭三十二年に、「夏、吳越を伐つ。始めて師を越に用う。史墨曰く、『四十年に及ばず。越其れ吳有りや？越歲を得るに吳之を伐てば、必ず其の凶を受く』」。註に曰く、「存亡の數、三紀に過ぎず。歲星三周して三十六歲、故に曰く『四十年に及ばず』」。此の年歲は星紀に在り。星紀は其の分なり。歲星在る所は、其の國に福有り。吳先に兵を用う。故に、反りて其の殃を受く。哀二十二年、越吳を滅す。此に至りて三十八歲なり。李淳風（602‐670、唐初の天文学･数学者）曰く、「天下秦を誅す。歲星東井に聚る。秦の政は暴虐、歲星仁和の理を失い、歲星恭肅の道に違い、諫を拒（こば）み讒（ざん）を信ず。是の故に、胡亥（秦二代皇帝）滅亡に終る」。復曰く、「歲星は清明にして潤澤、所在の國の分は大吉。君令時に合う。則ち歲星光熹し、年（みのり）豐かに人安んず。君暴虐を尚し、人をして不便せしめば、則ち歲星の色芒角し怒る（チカチカする）。則ち兵起る」。此に由りて之を言ふ、歲星在る所、或は福德有り、或は災祥有り。豈に皆人事に本とせざるや？夫れ吳越の君、德は均しく勢は（匹）敵す。闔閭（呉王）師を興し、吞滅に志し、拯民の為には非らず。故に歲星は越に福して吳に禍す。秦の殘酷、天下之を誅し、上は天意に合う。故に歲星は秦に禍して漢に祚す（天子の位を与える）。熒惑（火星）は罰星なり。宋の景公一つの善言を出す。熒惑三舍に退移す。而して二十七年に延ぶ。此を以て之を推すに、歲を善星と為し、無道を福せず。火（星）を罰星と為し、有德を罰さず。此の二者を舉げて、其の他を知る可し。況や臨む所の分、其の政の隨（まま）に之を善惡と化し、各（おのおの）其の本の色を變え、芒角の大小、隨（したが）いて禍福を為す。各時に隨いて之を占う。淳風曰く、「夫れ形器は（天）下に著（あらわ）れ、精象は（天）上に繫る」。近くは之を身に取り、耳目は肝腎の用を為し、鼻口は實に心腹資す所、彼此影響す。豈に然らざるか？『易』に曰く、「天に在りて象を成す、地に在りて形を成す。變化して見（あらわ）る」。蓋し人事を本とするのみ。刑德向背（いわゆる兵陰陽家説；上海博楚簡『魯邦大旱』譯註、谷中 信一、[HP](http://mcm-www.jwu.ac.jp/~skproject/about/publication/pdf/1st-5.pdf)）の說、尤も信ずに足らず。夫れ刑德は天官の陳（陣）、背水陳は絕紀（絶地）と為し、向山坂陳は廢軍（無用の軍）と為す。武王紂を伐つ。背に濟水、山坂に向いて陳す。二萬二千五百人を以て、紂の億萬を擊ちてこれを滅す。今目睹す可きは、國家元和より已後今に至るに三十年間、凡そ四たび趙寇を伐ち、昭義軍加うに數道の衆を以てし、常に十萬を號す。之を圍み城縣に臨み、其の南を攻めて拔けず。其の北を攻めて拔けず。其の東を攻めて拔けず。其の西を攻めて拔けず。其れ四度之を圍み、通じて十歲有り。十歲の內、東西南北、豈に刑德、向背、王相、吉辰有りや？其れ拔けずは、豈に曰はずか、「城堅く、池深く、糧多く、人一なるかな」と。復往事を以て之を驗（ため）すに、秦は累世戰勝し、竟（つい）に六國を滅す。豈に天道が二百年間常に乾方に在り、福德が常に鶉首に居りしや？豈に曰わずや？穆公已に還り、身を卑し士に趨（おもむ）き、耕戰に務め、法令を明らかにして之に致ると。故に梁の惠王（在位BC369～319）、尉繚子（うつりょうし[漢文大系](https://kanbun.info/shibu02/utsuryo00.html)）に問いて曰く、「黃帝に刑德有り、百戰を以て百勝す可し、其れ之有りや？」尉繚子曰く、「然らず。黃帝が所謂刑德は、刑以て之を伐ち、德以て之を守る。世の所謂刑德に非ず」。「夫れ賢を舉げ能を用いば、時日せずして利。法を明らかに令を審にせば、卜筮せずして事は吉。功を貴び勞を養わば、禱祠せずして福を得」。周の武王紂を伐つ。師は汜水の共頭山に次（やど）り、風雨疾雷、鼓旗毀（こぼ）ち折り、王の驂乘（右側陪坐者）惶懼（恐懼）し死なんと欲（す）。太公曰く、「夫れ兵を用うは、天道に順いて未だ必ずしも吉ならず、これに逆らいて未だ必ず凶ならず。若し人事を失わば、則ち三軍敗れ亡ぶ。且た天道鬼神、これを視て見ず、これを聽きて聞かず。故に智者は法（の）らず、愚者はこれに拘わる。若し乃ち賢を好（よみ）し能に任せば、事に舉（こぞ）りて時を得る。此れ則ち時日を看ずして事利し、卜筮に假らずして事吉にして、禱祠を待たずして福從う」。遂に驅の前進を命ず。周公曰く、「今、時は太歲に逆い、龜灼は凶と言い、卜筮は不吉、星凶にして災と為す。請う、師を還すことを」。太公怒りて曰く、「今、紂は比干を剖き、箕子を囚え、飛廉を以て政を為す。これを伐つに何ぞ不可有りや？桔草朽骨（[古代](https://www.moedict.tw/%E5%8F%A4%E4%BB%A3)[占卜](https://www.moedict.tw/%E5%8D%A0%E5%8D%9C)[用](https://www.moedict.tw/%E7%94%A8)の[蓍](https://www.moedict.tw/%E8%93%8D)[草](https://www.moedict.tw/%E8%8D%89)[及](https://www.moedict.tw/%E5%8F%8A)[龜甲](https://www.moedict.tw/%E9%BE%9C%E7%94%B2)）、安んぞ知る可きか！」。乃ち龜を焚（や）き、蓍（めどき）を折り、衆を率いて先に涉る。武王之に從い、遂に紂を滅ぼす。宋高祖は慕容超を廣固に圍み、將に城を攻めんとし、諸將咸（ことごと）く諫めて曰く、「今は往亡（陰陽道の凶日）の日、兵家忌む所」。高祖曰く、「我は往、彼は亡、吉孰くにか大ならん！」。乃ち命じて悉く登り、遂に廣固に克つ。後魏の太祖武帝が後燕の慕容麟を討つ。甲子晦日に軍を進む。太史、晁崇に奏せ令めて曰く、「昔し紂は甲子日を以て亡ぶ」。帝曰く、「周の武（王）豈に甲子日を以てせずば勝てりや？」崇以て對（こた）うこと無し。遂に戰いてこれを破る。後魏の太武帝は夏の赫連昌を統萬城に征す。師は城下に次（やど）り、昌は鼓噪して前（すす）む。會て風雨賊に從いて後に來ること有り。太史進みて曰く、「天は人を助けず。將士飢渴す。願はくば且たこれを避くことを」。崔浩曰く、「千里して勝を制すは一日。豈に得て變易す。風道人に在り、豈に常有りや！」。帝これに從う。昌軍大敗す。或ひと曰く、「此の如きは、陰陽向背、信ずに足らずと定む。孫子これを敘ぶは、何ぞ？」答えて曰く、「夫れ暴君昏主は、或は一寶一馬と為し、則ち必ず人を殘し（むごい扱いをする）志を逞す（思い通りにする）。天道鬼神を以てすに非ず、誰か能く制し止む？」故に孫子これを敘ぶ。蓋し深旨有り。寒暑時氣、其の行を節制して止む。周瑜は孫權の為に曹公に四敗を數（はか）る。一ひと曰く、「今は盛寒、馬に稾草無し。中國を驅ける士衆、遠く江湖を涉るに、水土を習はず。必ずや疾病生ず。此れ用兵の忌なり」。寒暑は同じく天時に歸す。故に聯ねて以てこれを敘す。

孟氏曰く、兵は天運に法（の）るなり。陰陽は剛柔盈縮なり。陰を用いば則ち沉（しづ）み虛にして固（もと）より靜。陽を用いば則ち輕く捷（すばや）く猛（たけ）く厲（すざまじ）。後（おく）れば則ち陰を用い、先ずれば則ち陽を用う。陰は蔽無きなり。陽は察無きなり。陰陽の象に定形無し。故に兵は天に法り、天に寒暑有り、兵に生殺有り。天則ち殺に應じて物を制す。兵は則ち機に應じて形を制す。故に「天」と曰うなり。
賈林曰く、「時制」を讀みて「時氣」と為す。其の善き時に從うを謂い、其の氣候の利を占うなり。
杜佑曰く、謂天に順い誅を行う。陰陽四時剛柔の制に因る。
梅堯臣曰く、兵は必ず天道に參じ、氣候に順い、時を以てこれを制す。所謂制なり。『司馬法』に曰く、「冬夏に師を興さずは、民を兼愛する所以なり」。
王晳曰く、陰陽を謂う。天道、五行、四時、風雲、氣象を總るなり。善く之を消（陰気のなくなること）息（陽気の生じること）し、以て軍勝に助く。然るに異人特に其の訣を授くに非ず、則ち未だ由なし。黃石が張良に書を授くが若し、乃ち『太公兵法（六韜：[漢文大系](https://kanbun.info/shibu02/rikutou00.html)）』是なり。意は豈に天機神密（造化の神秘）は、常人の得て知る所に非ずや？其れ諸十數家紛紜とし、抑も未だ以て審に取るに足らず。寒暑は、吳起（BC440－381年、呉子、[漢文大系](https://kanbun.info/shibu02/goshi00.html)）が云うが若く、「疾風、大寒、盛夏、炎熱」の類。時制は、時に因りて利し害す、而して宜を制す。范蠡（越王勾践に仕え、勾践を春秋五覇の一人となす）曰く、「天時は作（な）さず、人を客と為ざず」是なり。
張預曰く、夫れ陰陽は、孤虛（奇門遁甲「[HP](https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/44606/1/INO.pdf)」の六甲孤虚法）向背（天文方位説）の謂に非ず。蓋し兵は自ら陰陽有るのみ。范蠡曰く。「後（おく）れば則ち陰を用い、先（さき）んずれば則ち陽を用う。盡く敵の陽を節し、吾が陰を盈たし節してこれを奪う」。又、云く、「右に設（しつら）え牝と為し、左に益して牡と為す。早晏以て天道に順う」。李衛公（李衛公問対、[漢文大系](https://kanbun.info/shibu02/montai00.html)）解して曰く、「左右は人の陰陽。早晏は天の之陰陽。奇正は天人相變の之陰陽」。此れ皆言ふは、兵は自ら陰陽有り、剛柔の用、天官の日う時の陰陽に非ず。今、尉繚子の〈天官〉の篇を觀るに、則ち義最も明らかなり。『大白陰經』に、亦、〈天無陰陽〉の篇有り。皆著すに卷首と為し、以て世人の惑を決（さ）かんとす。太公曰く、「聖人、後世の亂を止めんとす。故に、譎（きつ、奇異で怪しい）書を作為す。天道に寄りて勝つを以てせば、兵に益無し」。是亦然り。唐太宗、亦、曰く、「凶器、兵より甚しきは無し。行兵苟も人事に便（へつら）い、豈に以て避忌し疑を為す」。寒暑は、冬夏に師を興すを謂う。漢が匈奴を征すに、士多く指を墮し（天候極寒の形容）、馬援（BC14－49年、将軍）蠻を征すに、卒多く疫死す。皆て冬夏に師を興すが故なり。時制は、謂天時に順いて制し征討すなり。『太白陰經』に言く、天時は乃ち水旱、蝗雹、荒亂の天時にして、孤虛向背の天時に非ず。

（地者，遠近、險易、廣狹、死生也。）
曹操曰く、九地を以て形勢不同じからずを言う。時制に因りて利すなり。論は〈九地〉篇中に在り。
李筌曰く、形勢の地を得て、死生の勢有り。
梅堯臣曰く、形勢の利害を知る。
張預曰く、凡そ用兵は、先ず地形を知り、遠近を知るを貴となす。則ち能く迂直の計を為す。險易を知れば、則ち能く步騎の利を審ひらかにす。廣狹を知れば、則ち能く衆寡の用を度る。死生を知れば、則ち能く戰散の勢を識る。

（將者，智、信、仁、勇、嚴也。）
曹操曰く、將は宜しく五德備うなり。
李筌曰く、此の五つは、將の為の德、故に「師（将軍）」有「丈人（大器）」の稱なり。（師貞、丈人、吉无咎；師は器量大なれば吉、咎はなし）。
杜牧曰く、先王の道は仁を以て首と為す。兵家者流は智を用うを先と為す。蓋し智は能く權を機（たくら）み、變通を識る。信は刑賞において人をして惑はしめず。仁は人を愛(大事)にし物を憫れみ、勤勞を知る。勇は決して勝ち勢に乘り、逡巡せず。嚴は威刑を以て三軍を肅す。楚は申包胥を越に使わす。越王勾踐は將に吳を伐たんとし、戰を問いて曰く、「夫れ戰は、智力を始とし、仁がこれに次ぎ、勇がこれに次ぐ。不智ならば則ち民の極を知ること能わず、以て天下の衆寡を詮度すること無し。不仁ならば則ち三軍と飢勞の殃を共にすること能わず。不勇ならば則ち疑を斷ち以て大計を發すこと能わず。
賈林曰く、智に專任せば則ち賊（そこなう）、仁に偏施せば則ち懦（おくびょう）、信に固守せば則ち愚、力に恃勇せば則ち暴、嚴に令過せば則ち殘（むごい）。五者を兼ね備え、各（おのおの）其の用に適（かな）えば、則ち將帥と為（す）可し。
梅堯臣曰く、智は能く發謀し、信は能く賞罰し、仁は能く附衆し、勇は能く果斷し、嚴は能く立威す。
王晳曰く、智は先見して惑わず、能く謀慮し、權變に通ず。信は令を號すに一なり。仁は惠撫し惻隱し、人心を得る。勇は義に徇じ懼れず、能く果毅なり。嚴は威嚴を以て衆心を肅す。五つは相い須（必要）し、一つを闕（か）くも不可。故に、曹公曰く、「將は宜しく五德備うなり」。
何氏（何延錫、宋）曰く、智に非ずば、以て料敵（敵情の分析）應機（応変臨機）すること不可。信に非ずば、以て訓人率下すること不可。仁に非ずば以て附衆撫士すること不可。勇に非ずば、以て決謀合戰すること不可。嚴に非ずば、以て服強齊衆すること不可。全て此の五才は將の體なり。
張預曰く、智は亂る可からず。信は欺ぐ可からず。仁は暴す可からず。勇は懼る可からず。嚴は犯す可からず。五德皆て備う、然して後に以て大將と為（す）可し。

（法者，曲制、官道、主用也。）
曹操曰く、部曲、旛幟、金鼓の制なり。官は百官の分なり。道は糧路なり。主は主たる軍費用なり。
李筌曰く、曲は部曲なり。制は節度なり。官は爵賞なり。道は路なり。主は掌なり。用は軍資用なり。皆て師の常法にして將が治む所なり。
杜牧曰く、曲は部曲隊伍に分畫有り。制は金鼓、旌旗に節制有り。官は偏裨（偏将，裨将。将を輔佐する副将）校列（五校校尉）に各（おのおの）官司有り。道は營陳（営陣）開闔（開閉）に各道徑（道路）有り。主は管庫・厮養（雑役の人）に職を守り其の事を主張せしむ。用は車馬・器械にして三軍須用（必須）の物なり。荀卿曰く、「械用有數（役務の員数には定数がある。葬礼・祭祀の器具には、身分秩序に応じた格差がある「王制篇第九-四」）。」夫れ兵は食を以て本と為（す）、須（す）べからく先ず糧道を計るべし、然る後に師を興す。
梅堯臣曰く、曲制は部曲隊伍の分畫に必ず制有り。官道は裨校首長の統率に必ず道有り。主用は主軍の資糧百物に必ず用度有り。
王晳曰く、曲は卒伍の屬。制は其の行列・進退を節制す。官は群吏・偏裨なり。道は軍行及び所舍なり。主は其の事を主守す。用は凡そ軍の用、輜重・糧積の屬を謂う。
張預曰く、曲は部曲なり。制は節制なり。官は偏裨の任を分けることを謂う。道は糧餉の路を利すを謂う。主は軍資を職掌する人。用は費用の物を計度す。六者は用兵の要、宜しく處置するに其の法有り。

（凡此五者，將莫不聞，知之者勝，不知者不勝。）
張預曰く、已上の五事、人人同じく聞くも、但に、變極の理を深く曉れば則ち勝ち、然らずんば則ち敗ける。

（故校之以計，而索其情。）
曹操曰く、同じく五者を聞き、將に其の變極を知れば、即ち勝つ。其の情を索るとは勝負の情。
杜牧曰く、上五事を謂ふは、將に彼我の優劣を聞知、校量、計算欲（せ）むとし、然る後に其の情狀を搜索す。乃ち能くせば必ず勝ち、爾（かく）せずんば則ち敗（まけ）る。
賈林曰く、『書』に云く、「知ることの艱（かた）きに非ず、行うことの惟（こ）れ艱き」。
王晳曰く、當に知を盡すがごとし。言うは、五事を周知すと雖も、七計を待ちて以て其の情を盡す。
張預曰く、上已に五事を陳ぶ。此より而下、方（まさ）に彼我の得失を考校し、勝負の情狀を探索す。

（曰：主孰有道？）
曹操曰く、道は德智能。
李筌曰く、孰は實なり。有道の主、必ず智能の將有り。范增（BC278－BC204、項羽の首席谋臣幕僚）楚を辭し、陳平（？－BC178、項羽の手下做谋士）漢に歸す。即ち其の義なり。
杜牧曰く、孰は誰なり。言ふは、我と敵人の主、誰が能く佞を遠ざけ賢に親し、人に任せ疑わざるか。
杜佑曰く、主は君、道は道德なり。必ず先ず兩國の君、誰が知り誰が否かを考校す。荀息（じゅんそく）虞公の貪にして寶を好むを料（はか）るが若し、宮之奇（きゅうしき）懦にして強く是を諫むこと能はず（[韓非子48「十過）」3](http://ameblo.jp/yk1952yk/entry-11302638750.html)）。
梅堯臣曰く、誰が能く人心を得るや。
王晳曰く、韓信が項王を匹夫の勇、婦人の仁、名は霸を為すと雖も、實は天下の心を失いぬ、と言うが若し。謂ふは、漢王（劉邦）、武關に入り、秋毫も害す所無し。秦の苛法（煩雑な法）を除き、秦の民、大王（漢王）が秦に王たるを欲せざる者亡（な）し、是なり。
何氏曰く、『書』に云く、「我を撫（ぶ）せば則ち後（后、きみ）、我を虐（ぎゃく）せば則ち讎（あだ）」。撫虐の政，孰かこれ有りや。
張預曰く、先ず二國の君を校（かむが）う。誰が恩信の道有りや。即ち上に所謂「民と上（かみ）と意を同じくせしむ」はこれ道なり。淮陰（韓信）、項王が仁勇高祖に過ぎ、而して有功を賞せず、婦人の仁を為すを料るが若し、亦、是なり。

（將孰有能？）
杜牧曰く、將孰（いずれ）か能有る者か、上に所謂「智、信、仁、勇、嚴」なり。
梅堯臣、杜牧の註に同じ。
王晳曰く、漢王の魏の大將柏直を問うが若し、曰く「是口尚乳臭し、韓信に當ること能はず」の類是なり。
張預曰く、彼我の將を察すに、誰ぞ智、信、仁、勇、嚴の能有りや。若漢の高祖の魏の將柏直を料り韓信に當ること能はずとするが類なり。

（天地孰得？）
曹操、李筌並びに曰く、天の時と地の利。
杜牧曰く、天者は上に謂う所の「陰陽、寒暑、時制」なり。地は上に謂う所の「遠近、險易、廣狹、死生」なり。
杜佑曰く、兩軍の據る所を視、誰が天の時、地の利を得るを知る。
梅堯臣曰く、天の時を稽（考）合し、地の利を審に察す。
王晳、杜牧の注に同じ。
張預曰く、兩軍の舉ぐ所、誰が天の時、地の利を得るかを觀る。魏の武帝、盛冬に吳を伐ち、慕容超、（公孫五樓の進言に従わず）大峴に據らざるが若し。則ち天の時、地の利を失う者なり。

（法令孰行？）
曹操曰く、設けば犯さず、犯せば必ず誅す。
杜牧曰く、法を縣（かか）げ禁を設く。貴も賤も一が如し。魏絳（ぎこう、春秋時代の晋の武将）僕を戮す（悼公の弟の楊干が列を乱したので、その御者を処刑）、曹公髮を斷つ、是なり。\*曹叡（魏明帝）天姿秀出、立てば髮は地に垂れるのことか？
杜佑曰く、號を發し令を出せば、校孰れか下、敢えて犯さず。
梅堯臣曰：衆を齊（ととの）うに法を以てし、衆を一にすに令を以てす。
王晳曰く、孰か能く法を明らかにし令を便（簡略）せば、人は聽きて從う。
張預曰く、魏絳は揚干を戮し、穰苴は莊賈を斬り、呂蒙は鄉人を誅し、臥龍は馬謖を刑す、茲は所謂「設けば犯さず、犯せば必ず誅す」。誰が為に此の如くす？

（兵衆孰強？）
杜牧曰く、上下（かみしも）和同せば、勇戰に於て強を為し、衆車多を卒（い）て強を為す。
梅堯臣曰く、內（うち）和し外（そと）附く。
王晳曰く、強弱相形すを以て足る、而して知る。
張預曰く、車堅く馬良く、士勇にして兵に利。鼓を聞きて喜び、金を聞きて怒る。誰か然りと為さんか？

（士卒孰練？）
杜牧曰く、旌旗を辨（区別）し、金鼓を審かにし、開合を明らかにし、進退を知り、馳逐（疾馳追逐）に閑し（慣れ）、弓矢に便し（慣れ）、擊刺（兩軍戈矛を以て相攻む）に習（習熟）す。
杜佑曰く、誰が兵器強利にして、士卒の簡練者を知る。故に王子曰く、「士、素より習わずんば、陳（陣）に當りて惶惑す（おどおど惑う）。將、素より習わずんば、陳に臨みて闇變す（自失する）」。
梅堯臣曰く、車騎に閑習（熟習）せば、孰の國ぞ精粗ならん？
王晳曰く、孰訓の精か？
何氏曰く、勇怯強弱、豈に能く一概か？
張預曰く、離合聚散の法、坐作（座立）進退の令、誰ぞ素より閑習すや？

（賞罰孰明？）
杜牧曰く、賞僭（身分不相応に）せずんば、刑濫（みだり）にならず。
杜佑曰く、善を賞し惡を罰す。誰が分明者かを知る。故に、王子曰く「賞すに度無くば、則ち費して恩無し。罰すに度無くば、則ち戮して威無し」。
梅堯臣曰く、賞すに功有り、罰すに罪有り。
王晳曰く、孰か能く賞すに必ず功に當り、罰すに必ず情を稱すや？
張預曰く、賞に當る者は、仇怨と雖も必ず錄す。罰に當る者は、父子不舍（名残を惜しむ）と雖も、又『司馬法』に曰く、「賞すに時を逾（こ）えず、罰すに列を遷（うつ）さず」と。誰に於て明らかと為すや？

（吾以此知勝負矣。）
曹操曰く、七事を以てこれを計し、勝負を知る。
賈林曰く、上七事を以て彼我の政を量り校えば、則ち勝敗見る可し。
梅堯臣曰く、能く其の情を索（もと）めば、則ち勝負を知る。
張預曰：七事に俱（つぶさ）に優（まさ）れば、則ち未だ戰わずして先に勝つ。七事に俱に劣れば、則ち未だ戰わずして先に敗れる。故に、勝負は預め知る可し。

（將聽吾計，用之必勝，留之；將不聽吾計，用之必敗，去之。）
曹操曰く、計を定むこと能わずんば、則ち退きて去る。
杜牧曰く、若し彼自ら護に備え、我が計に從わずんば、形勢は均等す。以て相加うこと無くば、戰を用いば必ず敗れる。引きてこれを去る。故に、『春秋』『傳』に曰く、「允當（いんとう）すれば則ち歸る（過分を求むこと無し）」なり。
陳皥（ちんこう）曰く、孫武、書を以て闔閭に干（もと）めて曰く、「吾を計策を聽きて用いば、必ず能く敵に勝つ。我當にここに留りて去らず。吾が計策を聽かずんば、必ず當に負け敗れ、我これを去りて留らず」と。此れを以て闔閭を感動せしめ、庶（もろもろ）必ず用いらる。故に闔閭曰く、「子が十三篇、寡人（我は）盡くこれを觀れり」。其の時、闔閭、行軍し師を用う。多く自ら將と為る。故に、「主」と言わず、「將」と言う。
孟氏曰く、將は裨（副）將なり。吾が計畫を聽けば勝ち、則ちこれに留む。吾が計畫に違えば敗れ、則ちこれを除去す。
梅堯臣曰く、武は十三篇を以て吳王闔閭に干む。故に首篇此の辭を以てこれを動かす。謂ふは、王將、我が計を聽きて戰に用いば必ず勝ち、我は當に此に留む。王將、我が計を聽き戰に用いずば必す敗れ、我は當に此を去る。
王晳曰く、將は行なり。用は用兵を謂うのみ。言行吾が此の計を聽き、兵を用いば則ち必ず勝ち、我は當に留む。行、吾が此の計を聽かず、兵を用いば則ち必ず敗れ、我は當に去る。
張預曰く、將は辭なり。孫子謂く、今將吾が陳ぶ所の計を聽きて、兵を用いば則ち必ず勝つ。我乃ち此に留む。將吾が陳ぶ所の計を聽かずして、兵を用いば則ち必ず敗れる。我は乃ちこれ他國に去る。此の辭を以て吳王を激し用うを求む。

（計利以聽，乃為之勢，以佐其外；）
曹操曰く、常法の外なり。
李筌曰く、計利既に定まる。乃ち形勢に乘る勢なり。其の外を佐くは、常法の外なり。
杜牧曰く、利害を計算すは、是れ軍事の根本。利害已に聽用さるならば、然後に常法の外に、更に兵勢を求む。以て其の事を助佐す。
賈林曰く、其の利を計り、其の謀を聽き、敵の情を得る。我乃ち奇譎の勢を設け以てこれを動かす。外（ほか）は、或いは傍攻し、或いは後躡（追跡）し、以て正陳（陣）を佐く。
梅堯臣曰く、內に計を定め、外に勢を為し、以て成勝を助く。
王晳曰く、吾計の利已に聽き、復、當に應變を知り、以て其の外を佐く。
張預曰く、孫子又謂う、吾が計す所の利、若し已に聽き從わば、則ち我當に復た兵勢を為し、以て外に其の事を佐助す。蓋し兵の常法は、即ち人に明言す可し。兵の利勢は、敵に因りて為す須し。

（勢者，因利而制權也。）
曹操曰く、制は權に由る。權は事に因りて制す。
李筌曰く、謀は事に因りて制す。
杜牧曰く、此より便に常法の外を言う。勢、夫れ勢は、先に見る可からず。或は敵の害に因りて我の利を見る。或は敵の利に因りて我の害を見る。然る後に始めて機權を制し勝を取る可し。
梅堯臣曰く、利に因りて權を行い以てこれを制す。
王晳曰く、勢は、其の變に乘るものなり。
張預曰く、所謂勢は、事の利に因る須し。制して權謀を為せば、以て敵に勝つのみ。故に先に言うこと能わず。此より後は、略して權變と言う。

（兵者，詭道也。）
曹操曰く、兵には常の形無し。詭詐を以て道と為す。
李筌曰く、軍は詐を厭わず。
梅堯臣曰く、譎（あざむくこと）に非ずんば、以て權を行う可からず。權に非ずんば、以て敵を制す可からず。
王晳曰く、詭は、敵に勝つを求む所以。衆を禦ぐは必ず信を以てす。
張預曰く、兵を用うは仁義を本とすと雖も、然して其の勝を取るに必ず詭詐在り。故に柴を曳き塵を揚ぐ。欒枝の譎なり。萬弩を齊發す、孫臏の奇なり。千牛を俱奔す、田單の權なり。囊沙壅水（砂袋で河を塞き止める）、淮陰の詐なり。此れ皆詭道を用いて勝を制すなり。

（故能而示之不能，）
張預曰く、實に強くしてこれを弱きと示し、實に勇にしてこれを怯と示す。李牧、匈奴に敗れ、孫臏、龐涓を斬るの類なり。

（用而示之不用，）
李筌曰く、言うは、己に實に師を用い、外にこれを怯と示す。漢將の陳豨反（そむ）き、匈奴に連兵す。高祖使十輩を遣してこれを視しむ。皆擊つ可しと言う。復た婁敬（ろうけい）を遣す。報じて曰く、「匈奴を擊つ可からず」。上問は其れ故、對えて曰く、「夫れ兩國相擊てば、宜しく其の長を矜誇す。今臣往きて、徒に羸（るい、やせ細った）老を見る。此れ必ず能にしてこれを不能と示す。臣以為（おも）うに擊つ可からず」。高祖怒りて曰く、「齊虜、口舌を以て官を得、今吾が衆を妄（みだ）りに沮（はば）む！」婁敬を廣武に械（手枷足枷）す。三十萬衆を以て白登に至る。高祖、匈奴に圍まるる所と為り、七日食に乏す。此れ師外にこれを示すに怯を以てすの義なり。
杜牧曰く、此れ乃ち詭詐、形を藏（かく）す。夫れ形なるは、敵に見せしむ可からず。敵人、形を見れば、必ず應有り。『傳』に曰く、「鷙鳥（しちょう、猛禽）將に擊たむとし、必ず其の形を藏す」。匈奴が羸老を漢使に示す義の如し。
杜佑曰く、言うは、己に實に能、用は、外にこれを示すに不能、不用を以てし、敵をして我に備へせしめず。孫臏竈を减らして龐涓を制すが若し。
王晳曰く、強は弱を示し、勇は怯を示し、治は亂を示し、實は虛を示し、智は愚を示し、衆は寡を示し、進は退を示し、速は遲を示し、取は捨を示し、彼は此を示す。
何氏曰く、能にしてこれを示すに不能とするは、單于が羸師で高祖を誘い、平城に圍うが如き是なり。用にしてこれを示すに不用とするは、李牧、雲中に兵を按んじ、匈奴を大いに敗るが如き是なり。
張預曰く、戰を欲してこれを示すに退く。速きを欲してこれを示すに緩にす。班超（はんちょう）莎車（さしゃ、サマルカンド）を擊ち、趙奢（ちょうしゃ）秦軍を破るの類なり。

（近而示之遠，遠而示之近。）
李筌曰：敵をして備えを失わしむ。漢將の韓信は魏王の豹を虜にす。初め舟を陳（なら）べ臨晉に渡らんと欲（す）。乃ち師を浮木甖（かめ）に潜め、夏陽より安邑を襲う。而して魏備えを失う。耿弇（こうえん）の張步を征すこと、亦、先に臨淄を攻む。皆遠を示す勢なり。
杜牧曰く、近く敵を襲はむと欲さば、必ず以て遠く去る形を示す。遠く敵を襲はむと欲さば、必ず以て近く進む形を示す。韓信、盛兵で晉に臨み、而して夏陽に渡る。此れ乃ち近形を以て示し、而して遠く敵を襲ふ。後漢の末、曹公と袁紹と官渡に相ひ持す。紹は、將の郭圖、淳于瓊、顔良等を遣し白馬に東郡太守劉延を攻む。紹は兵を引き黎陽に至り、將渡河す。曹公北に延津を救う。荀攸曰く、「今兵少く敵せず、兵勢を分てば乃ち可。公、兵を延津に致り將渡らむと欲す。兵其の後に向えば、紹必ず西にこれに應ず。然る後に輕兵白馬を襲い、其の不備を掩（おそ）い、顔良擒（いけど）る可し」。公これに從う。紹、兵渡るを聞きて、即ち留り、兵を分け西にこれに應ず。公乃ち軍を引きて白馬に行趨す。未だ十餘里に至らずして、良大いに驚き來戰す。張遼、關羽を使し前進し擊破し、顔良を斬り、白馬の圍を解く。此れ乃ち以て遠形を示し而して近く敵を襲うなり。
賈林曰く、去就は我に在り、敵何ぞ由を知る？
杜佑曰く、近を欲して其の遠を設く。遠を欲して其の近を設く。敵軍を誑耀し、これを示すに遠を以てし、本は其の近に從（よ）る。韓信の安邑を襲うが若し。
梅堯臣曰く、其の不能を使て測る。
王晳、上注に同じ。
何氏曰く、遠にしてこれを近に示すは、韓信、舟を陳べ晉に臨みて夏陽に渡る、是なり。近にしてこれを遠に示すは、晉侯、虢を伐ち、虞に假道す、是なり。
張預曰く、近にこれを襲はむと欲せば、反りて示すに遠を以てす。吳と越とは水（河）を夾みて相い距（ふせ）ぐ。越、為左右に卒を句（ま）げ、相去ること各五里。夜爭し鼓を嗚らして進む。吳人分ちて以てこれを禦ぐ。越、乃ち潜かに涉り、吳中軍に當りてこれを襲い、吳大敗す、是なり。遠にこれを攻むを欲して、反りて示すに近を以てす。韓信、兵を陳べて晉に臨み、而して夏陽に渡る、是なり。

（利而誘之，）
杜牧曰く、趙將の李牧（～BC229、守戦の名将）、大いに畜を縱ち牧人衆く野に滿つ。匈奴小しく入れば、佯北（ようほく、:仮裝敗退）し勝たず。數千人を以てこれに委ぬ。單于これを聞きて、大いに喜び、衆大を率いて至る。牧多く奇陳を為し、左右より夾擊し、大いに破り匈奴十餘萬騎を殺す。
賈林曰く、利を以てこれを動かす。動して形有れば、我が形に因りて勝を制す所以なり。
梅堯臣曰く、彼の貪利、則ち貨を以てこれを誘う。
何氏曰く、利にしてこれを誘うとは、赤眉輜重を委ね而して鄧禹に餌とするが如き是なり。
張預曰く、示すに小利を以てし、誘いてこれに克つ。楚人、絞（こう）を伐つが若し。莫敖（ばくごう、楚の軍官）曰く、「絞は小にして輕し。請う、采樵（さいしょう、木こり）者を扞（まも）ることなく以てこれで誘う」。是に絞人、楚三十人を獲る。明くる日、絞人爭いて出ず。楚の役徒（服労役者、木こり）を山中に驅（か）る。楚人、山下に伏兵を設けて大いにこれを敗る、是なり。

（亂而取之，）
李筌曰く、敵の貪利必ず亂る。秦王姚興（ようこう、五胡十六国の後秦の第2代皇帝、在位 394～416）、禿髮傉檀（とくはつ じょくだん、五胡十六国時代の南涼の第3代王、在位402年～414年）を征す。悉く部內牛羊を驅り、野に散放す。縱（ほしいままに）に秦人虜掠す。秦人利を得て、既にして行列無し。，傉檀、陰に十將を分け、掩いてこれを擊ち、大いぬ秦人を敗り、首七千餘級を斬る。「亂してこれを取る」の義なり。
杜牧曰：敵に昏亂有れば、以て乘じてこれを取る可し。『傳』に曰く、「弱を兼ね（弱小は合併し）昧（蒙昧）を攻め、亂を取り亡を侮（あなど）る（書経、仲虺之誥）。武の善き經なり」。
賈林曰く、我、姦智をしてこれを亂れしむ。亂を候（うかが）いてこれを取る。
梅堯臣曰く、彼亂れば、則ち乘じてこれを取る。
王晳曰く、亂は無節制を謂う。取は易きを言う。
張預曰く、詐りて紛亂を為し、誘いてこれを取る。吳越相い攻むが若し。吳、罪人三千を以て、整はざるを示し、以て越を誘う。罪人或は奔り或は止る。越人これを爭う。為に吳敗る所是なり。言うは、敵亂して後に取る者に非ず。《春秋》の法、凡そ「取」と書くは、易きを言う。魯師邿を取る是なり。

（實而備之，）
曹操曰く、敵、實を治む。これに備う須（べ）し。
李筌曰く、敵の實に備う。蜀の將、關羽、魏の樊城を圍んと欲（し）て、吳の將、呂蒙、其の後を襲うを懼る。乃ち多く留め兵を備え荊州を守る。蒙は陰（ひそか）に其の旨を知り、遂に疾を以てこれを詐く。羽は乃ち備兵を撤去し、遂に蒙が取る所と為す。而して荊州は吳に沒す。則ち其の義なり。
杜牧曰く、壘に對して相持す。虛實を論ぜず。常に備を為す須し。此れ言ふは、常に居り事無く、鄰は封じ境を接し、敵若し政治實を修め、上下相愛し、賞罰明らかに信あり、士卒精練たらば、即ちこれに備う須し。交兵を待たず然して後に備を為す。
陳皥曰く、敵若し不動完實ならば、我當に謹みて備う。亦、自ら實にして以て敵に備う。
梅堯臣曰く、彼實ならば則ち備えざる可からず。
王晳曰く、彼の將有りて以て吾の不備を擊つ。
何氏曰く、彼の敵但に其の實を見、而して未だ其の虛の形を見ず。則ち當に力を蓄へてこれに備う。
張預曰く、『經』に曰く、「之と角（対決）して有餘、不足の處を知る」。有餘は則ち實なり。不足は則ち虛なり。言ふは、敵人、兵勢は既に實、則ち我當に勝つ可からずの計を為し以てこれに待す、輕舉勿（な）かれ。李靖の『軍鏡』に曰く、「其の虛を觀れば則ち進み、其の實を見れば則ち止まる」。

（強而避之，）
曹操曰く、其の長ずる所を避く。
李筌曰く、力を量る。楚子隨を伐つ、隨の臣、季梁曰く、「楚人、左を上とす、君を必ず左にす。王と遇うこと無し。且（まさ）に其の右を攻めよ、右に良き無からん、必ず敗る。偏敗れば、衆乃ち攜（はな）れん」。少師曰く、「王に當らずんば、敵に非ず」。從わず。隨師敗績（大敗し功績を失う）す。隨侯逸す（逃げ去る）。強きを攻めて敗れるなり。
杜牧曰く、其の長ずる所を逃げ避く。言うは、敵人の乘兵強く氣銳ならば、則ち當に且つこれを回避須べし。其の衰懈（すいかい）を待ち、候、其の間隙（かんげき）にしてこれを擊て。晉末に、嶺南の賊、盧循（ろじゅん）、徐道覆、虛に乘じて建鄴を襲う。劉裕これを禦ぎて曰く、「賊、若し新亭を直上せば、且に當にこれを避けん。回りて蔡洲に泊せば、乃ち擒と成るのみ」。徐道覆、舟を焚き直上せんと欲（す）。循、以て不可と為し、乃ち蔡洲に泊す。竟に以て敗滅さる。
賈林曰く、弱を以て強を制す、理は變を待つ須し。
杜佑曰く、彼の府庫充實し、士卒銳盛なれば、則ち當に退避し、以て其の虛懈を伺い、變を觀てこれに應ず。
梅堯臣曰く、彼強ければ、則ち我當に其の銳を避く。
王晳曰く、敵兵精銳にして、我が勢寡弱なれば、則ち退避須べし。
張預曰く、『經』に曰く、「正正の旗を邀（さえぎ）る無れ、堂堂の陳を擊つ無れ」。言ふは、敵人の行陳修整にして、節制嚴明なれば、則ち我當にこれを避く。輕肆す可からず。秦晉相い攻む若きは、交綏して退く（両軍が互いに退く）、蓋し各其の失敗を防く。

（怒而撓之，）
曹操曰く、其の衰懈を待つなり。
李筌曰く、將の多く怒るは、權必ず亂れ易く、性堅からず。漢相の陳平、楚の權を謀り撓む。太牢を以て楚の使に具進す。（陳平）驚きて曰く、「是れ亞父（范増）の使や？乃ち項王の使や！（范増の使者かと思えば、何と、項王の使者ではないか、項王に范増を疑わせる策）」此れ怒らせてこれを撓むものなり。
杜牧曰く、大將の剛戾（ごうれい、剛愎「意地っ張り」乖戾「ひねくれ」）は、之を激して怒らしむ可し。則ち志を逞（たくま）しくし快意（思い込みで即決）し、志氣は撓み亂れ、本より（相手の）謀を顧ず。
孟氏曰く、敵人盛怒せば、當にこれに屈撓（くっとう）すべし（怖じ気付いたふりをして挑発する）。
梅堯臣曰く、彼褊急（へんきゅう、度量が狭く性急）にして怒り易ければ、則ちこれを撓め、憤激、輕戰（激しく怒らせ軽挙盲動）せしむ。
王晳曰く、敵持重（じちょう、慎重）せば、則ち激怒を以てこれを撓む。
何氏曰く、怒らしてこれを撓むは、漢兵、曹咎を汜水に擊つ是なり。
張預曰く、彼の性剛忿ならば、則ちこれを辱め怒らしむ。志氣撓み惑い、則ち謀らずして輕進す。晉人、宛春を執り以て楚を怒らすが若き是なり。尉繚子曰く、「寬、激して怒らしむ可からず」。言ふは、性の寬は、則ち激怒してこれに致らす可らず（寛大な将は相手を怒らすことができない）。

（卑而驕之，）
李筌曰く、幣重くして言は甘く、其の志、小さからず。後趙の石勒（せきろく、[274年](https://ja.wikipedia.org/wiki/274%E5%B9%B4) - 333年）、王浚（おうしゅん、[252年](https://ja.wikipedia.org/wiki/252%E5%B9%B4) - [314年](https://ja.wikipedia.org/wiki/314%E5%B9%B4)）に臣と稱す。左右これを擊たむと欲す。浚が曰く、「石公來たるは、我に奉（たてまつ）るを欲すのみ。敢えて言う、擊つ者は斬る」。饗を設け禮以てこれを待つ。勒乃ち牛羊數萬頭を驅り、上禮と聲言（公言）し、實は以て諸街巷を填（う）め、浚兵をして得て發せしめず。乃ち薊城に入り、浚を廳（庁）に擒（いけど）りし、これを斬りて燕を幷（あわ）す。卑而驕之、則ち其の義なり。
杜牧曰：秦末に、匈奴の冒頓（ぼくとつ、～BC174 ）初めて立つ。東胡強く、使をして冒頓に謂わしめて曰く、「頭曼（冒頓の父）が時の千里馬を得むと欲す」。冒頓以て群臣に問う。群臣皆曰く、「千里馬は國の寶にして、與（あた）うこと勿（なか）れ」。冒頓曰く、「奈何ぞ人鄰國に愛一馬を與えんや？」遂にこれを與う。居ることこれを頃（しばらく）して、東胡、使をして來さしめて曰く、「願わくば、單于の一閼氏（あつし、后妃）を得む」。冒頓、群臣に問う。皆怒りて曰く、「東胡は無道。乃ち閼氏を求むは、請う、これを擊つことを」。冒頓曰く、「人鄰國に愛一女子を與えんや？」これを與う。居ることこれを頃して、東胡復た曰く、「匈奴に棄地千里有り、吾これ有すを欲す」。冒頓、群臣に問う。群臣皆曰く、「これを與うこと亦可なり、與わざるも亦可なり」。冒頓大いに怒りて曰く、「地は國の本なり。本は何ぞ與うべきか」。諸れ與うと言う者を皆これを斬る。冒頓上馬し、國中に令して後有る者を斬り、東に東胡を襲う。東胡、冒頓を輕んじ、これが為に備えず。冒頓擊ちてこれを滅す。冒頓遂に西に月氏を擊ち、南に樓煩（ろうはん）、白羊、河南をを幷す，北に燕、代を侵し、秦が所使蒙恬（もうてん、～BC210、秦の将軍）が奪いし所の匈奴の地を悉く復た收む。
陳皥曰く、欲す所必ず顧みて恡（おし）む所無し。子女以て其の心を惑わす。玉帛以て其の志を驕らす。范蠡（はんれい、越王勾践 の軍略家）、鄭武（そんぶ、鄭君主、在位BC770-744）の謀なり。
杜佑曰：彼、其れ國を舉げ師を興し、怒りて進まんと欲（す）。則ち當に外に屈撓を示し、以て其の志を高くせしめ、惰に歸すを俟（ま）つ。要して（待ち受けて）これを擊つ。故に、王子曰く、「善く法を用うは、狸の鼠に與（くみ）すが如し。これに力（つと）めて智を與（ゆる）し、これに示すに猶卑（いやし）め、靜かにしてこれを下す」。
梅堯臣曰く、示すに卑弱を以てし、以て其の心を驕らしむ。
王晳曰く、卑弱を示し以てこれを驕らしむ。彼は我を虞らず、而して其の間を擊つ。
張預曰く、或は辭を卑くし賂を厚くす、或は羸師（るいし、衰弱疲弊の軍隊）佯北（ようぼく、仮装敗北）、皆所以令其れ驕怠（きょうたい、おごり高ぶって、すべきことを怠る）。吳子、齊を伐つ。越子、衆を率て朝す。王及び列士皆に賂有り。吳人皆喜ぶも、惟に子胥、懼れて曰く、「是、吳を豢すなり（飼い慣らす）！」後に果して越が為に滅ぼさる。楚、庸を伐ち、七遇皆て北（に）ぐ。庸人曰く、「楚、與して戰うに足らず矣！」遂に備を設けず。楚子乃ち二隊を為して以てこれを伐ち、遂に庸を滅ぼす。皆其の義なり。

（佚而勞之，）
一る本に「引而勞之」と作（す）。
曹操曰く、利を以てこれを勞す。
李筌曰く、敵佚し而して我これを勞すは、善き功なり。吳、楚を伐つ。公子光、計を伍子肯に問う。子胥曰く、「三師を為し以て肄（い、訓練）す可し。我一師を至せば、彼（楚）は必ず衆を盡して出ず。彼は出で我は歸る。亟（しばしば）肄して以てこれを疲れしむ。多方は以てこれを誤る。然る後に、三師以てこれに繼（つ）げば、必ず大いに克つ」。これに從う。楚、是に於てや、始めて吳に病む。
杜牧曰く、吳の公子光、楚を伐つに伍員に問う。員曰く、「三軍を為し以て肄す可し。我一師を至せば、彼は必ず盡して出ず。彼出でば則ち歸る。亟肄して以てこれを疲れしむ。多方は以てこれを誤る。然る後に三師以てこれに繼げば、必ず大いに克つ」。これに從う。是に子重ねて一歲に七たび奔命し、是に於いてや始めて吳に病む。終に郢（えい、楚の都）に入る。後漢末に、曹公既に劉備を破り、備は袁紹に奔る。兵を引きて曹公と戰わんと欲（す）。別駕の田豐（輔佐の知将）曰く、「操は善く兵を用う、未だ輕舉す可からず。以て久しくこれを持すに如かず。將軍、山河の固きに據り、四州の地を有つ。外に英豪と結び、內に農を修め戰う。然る後に、其の精銳を揀（えりわ）け、分けて奇兵と為し、虛に乘りて迭出（交互に出兵）し、以て河南に擾す（入り乱れる）。右を救えば則ち其の左を擊ち、左を救えば則ち其の右を擊ち、敵をして奔命に疲れしむ。人、業に安んぜず、我は未だ勞せずして彼は已に困せり。三年に及ばずして、坐して克つ可し。今、廟勝之策を釋（す）て、而して成敗を一戰に決せば、及ぶこと無きを悔いよう！」紹は從はず、故に敗れる。
梅堯臣曰く、我が佚を以て、彼の勞を待つ。
王晳曰く、多くの奇兵なり。彼出れば則ち歸り、彼歸れば則ち出ず。左を救えば則ち右、右を救えば則ち左。これを罷（疲れ）勞す所以なり。
何氏曰く、孫子に治力の法有り。佚を以て勞を待つ。故に論ず、敵に佚（余裕があれば）、我宜しく多方（あれやこれやと）以てこれ（敵）を勞弊せしめ、然る後に以て勝を制す可し。
張預曰く、我則ち力全きならば、彼則ち道敝（やぶ）らる。晉と楚、鄭を爭うが若（ごと）し。久しくして決せず。晉の知武子乃ち四軍を分けて三部と為す。晉は各一（部）を動かす。而るに楚は三（部）來たる。是に三駕して楚はこれと爭うこと能わず。又、申公巫臣、吳に楚を伐つを教う。是に子重一歲にして七たび奔命すは是なり。

（親而離之。）
曹操曰く、間（者）を以てこれを離す。
李筌曰く、其の行約を破り、其の君臣を間し、而して後に攻む。昔秦、趙を伐つ。秦相の應侯（范雎）、趙王に間すに曰く、「我、惟、趙が括（趙括）を用うを懼るのみ。廉頗（れんぱ）なら與（くみ）し易し」。趙王、これを然りとし、乃ち括を用い頗の代りと為す。秦が卒に四十萬を長平に坑（生き埋め）す所と為す。則ち其の義なり。
杜牧曰く、言うは、敵若し上下相い親しむは、則ち當に厚利を以て啗（くら）わしこれを離間せしむ。陳平、漢王（高祖）に言いて曰く、「今項王が骨鯁の臣（直言できる忠臣）、亞父（范増）、鐘離昧（しょうり ばつ)、龍且（りゅうしょ)、周殷の屬（たぐい）に過ぎず、數人にに過ぎず。大王誠に能く數萬斤金を捐（えん、バラまく）し、其の君臣を間せば、彼、必らず內に相い誅す。漢因りて兵を舉げこれを攻めば、楚を滅ぼすこと必ならむ」。漢王これを然りとす。黃金四萬斤を出し平に與え、これを使い間を反す。項王果して亞父を疑い、急擊せず滎陽に下り、漢王遁去（逃走）す。
陳皥曰く、彼（敵が）爵祿を恡（おし）めば、此れ必ずこれを捐（だ）す。彼財貨を嗇（しぶ）れば、此れ必ずこれを輕くす。彼殺罰を好めば、此れ必ずこれを緩（ゆる）む。其の上下相い猜せしむに因りて、離間の說を行うを得る。由余が秦に歸す所以、英布が漢を佐（たす）く所以なり。
杜佑曰く、利を以てこれを誘い、五つの間（者）を並び入れ、辯士に說を馳せ、彼の君臣と親しくし、其の形勢を分離せしめる。秦が反間（間諜）を遣（つかわ）し、趙君を欺誑（ききょう、たばかる）し、廉頗を廢し趙奢の子に任せしめ、卒に長平が敗有るが若し。
梅堯臣、杜牧註に同じ。
王晳曰く、敵相い親しくば、當に計謀を以てこれを離間す。
張預曰く、或は其の君臣を間し、或は其の交援を間し、相い貳（ふた）つに離しめ、然る後にこれを圖（はか）る。應侯は趙を間して廉頗を退け、陳平は楚を間して范增を逐（お）う。是は君臣相い離るなり。秦と晉は相い合し以て鄭を伐つ。燭之武（しょくしぶ、鄭の大夫）夜に出で、秦伯に說きて曰く、「今鄭を得れば、則ち晉に歸す。秦に益無し。鄭を捨て以て東道主と為すに如ず（鄭が晋に併合されるよりは、鄭をそのまま秦国の東に面する国として残した方が得策）」。秦伯、悟りて師を退（ひ）く。是、交援相い離すなり。

（攻其無備，出其不意。）
曹操曰く、其の懈怠を擊ち、其の空虛に出ず。
李筌曰く、懈怠を擊ち、空虛を襲う。
杜牧曰く、其の空虛を擊ち、其の懈怠を襲つ。
孟氏曰く、其の空虛を擊ち、其の懈怠を襲う。敵をして以て備う所を知らしめず。故に曰く、兵は無形にして妙と為す。太公曰く、「動くに不意より神（妙）なるは莫く、謀るに不識より善きは莫し（六韜）」。
梅堯臣、王晳の二註は上に同じ。
何氏曰く、其の無備を攻むとは、魏の太祖（曹操）、烏桓（うがん、東胡の後裔）を征すに、郭嘉（かくか、曹操の軍師）曰く、「胡は其の遠きを恃み、必ず設備せず。其の無備に因りて、卒然としてこれを擊てば、破滅すこと可なり」。太祖、行きて易水に至る。嘉曰く、「兵は神速を貴しとす。今千里人を襲うは、輜重多く、趨利以て難し。輕兵が兼道（二日の行程を一日で行く意から、大急ぎで行くこと）し以て出で、其の不意を掩（おそ）うに如かず」。乃ち密に盧龍塞を出で、直に單于庭（單于の王庭）を指し、合戰し、大いにこれを破る。唐の李靖（りせい、李世民の幕僚）、十策を陳べ以て蕭銑（しょうせん）を圖る。三軍の任を總管し、一に以て靖に委（ゆだ）ねる。八月、兵を夔州に集む。銑以て時に秋潦に屬（つ）く（集結す）。江水泛漲し（水位が増す）、三峽の路危し。必ずや靖、進むこと能わずと謂い、遂に備えを設けず。九月、靖、兵を率て進み、曰く「兵は神速を貴しとす、機は失う可からず。今兵始めて集むも、銑は尚、未だ知らず。水漲の勢に乘り、倏忽（しゅっこつ、たちまち）城下に至れ。所謂疾雷は耳を掩（おお）うに及ばず。縱使（たとえ）我と知れど、倉卒（あわてて）以て敵に應ずこと無く、此れ必ず擒（とりこ）と成さむ」。兵を進め夷陵に至り、銑始めて懼る。兵を江南に召すこと、果して至るに能わず。兵を勒し（整え）城を圍む。銑は遂に降る。其の不意に出ずとは、魏末に、將の鍾會（しょうかい）、鄧艾（とうがい）を遣わし蜀を伐つ。蜀の將姜維（きょうい）劍閣を守る。鍾會維を攻むも、未だ克たず。艾上言す、「請う、陰平を從え、邪徑に由り劍閣を出で、西に成都に入る。奇兵其の腹心を衝けば、劍閣の軍は必ず還り涪に赴く。則ち會は方に軌して進め。劍閣の軍は還らず。則ち涪に應ず兵は寡し。『軍志』に云く、「其の無備を攻め、其の不章に出ず。今其の空虛を掩えば、これを破ること必ならむ」。冬十月に、艾は陰平より無人の地を行くこと七百餘里。山を鑿ち道を通し、橋閣を造作し、山高く谷深く、至るに艱險（艱難峻険）為（す）。又、糧を運ぶこと將に匱（とぼ）しく、危殆に瀕す。艾は氈（せん、毛織りの敷物）を以て自ら裹（くる）み、推し轉げて下る。將士も皆、木や緣崖（がけぶち）を攀（よじ昇）り、魚貫して（ぞろぞろ連なって）進む。朱登、江油に至る。蜀の守將の馬邈（ばばく）が降る。諸葛瞻は涪より綿竹に還る。陳を列して相拒み、大いにこれを敗る。瞻及び尚書の張遵等を斬る。進軍して成都に至り、蜀主の劉禪が降る。又、齊の神武（高歓）東魏の將と為り、兵を率て西魏を伐つ。軍を蒲坂に屯し、三道の浮橋を造り渡河す。又、其の將の竇泰（とうたい）を遣わし潼關に趣かせ、高敖曹（高昂）は洛州を圍む。西魏の將、周文帝、軍を廣陽に出だし、諸將を召いて謂いて曰く、「賊は今、吾が三面を掎（き、牽制）し、又、河に橋を造り、必ずや渡らむと示し、吾が軍を綴（つづ）らむとす（閉じ込める）。竇泰をして得て西に入らしむのみ。久しく與に相持し、其の計得て行うは、良策に非ず。且つ、高歡、兵を用うに、常に泰を以て先驅と為し、其の下は多くの銳卒なり。屢（しばしば）勝ちて驕る。今、出でて其の不意、これを襲えば必ず克つ。泰に克てば、則ち歡は戰わずして自ら走（に）ぐ」。諸將咸（みな）曰く、「賊近くに在り、捨てて遠く襲う。事若し蹉跌（さてつ、見込み違いでしくじる）すれど、悔及ぶ可くも無し（悔いは無い）」。周文曰く、「歡は前に潼關を再襲し、吾が軍、霸上を過ぎず。今は大來、兵は未だ郊に出です。賊は顧みて吾但に自ら守るのみ、遠く鬬う意無しと謂い、又、志を得るに狃（な）れ、我が心を輕ずこと有り。此に乘じてこれを擊でば、何ぞ往きて克たざるや！賊、橋を造ると雖も、未だ能く徑渡せず。比の五日の中（うち）に、吾が竇泰を取るは必ならむ（必定）」。公等、疑う勿（なか）れ」。周文、遂に騎六千を率いて長安に還る。隴右に往かむと聲言（流言）す。辛亥に、潜に出軍し、癸丑の晨に、潼關に至る。竇泰、卒（にわか）に軍至るを聞き、惶懼（恐懼）して山に依りて陳を為すも、未だ成列すに及ばず。周文、これを擊破し、泰を斬り、首を長安に傳う。高敖曹、適（たまたま）洛州を陷れるも、泰が沒すを聞きて、輜重を燒き、城を棄て走（に）ぐ。
張預曰く、備え無きを攻むは、懈怠の處を謂い、敵の不虞せざる所は則ちこれを擊つ。燕人鄭の三軍を畏れ、而れども制人を虞らず、制人に敗れる所と為るが若き、是なり。不意に出ずは、虛空の地、敵が以て慮ばかり為さざるは、則ちこれを襲うを謂う。鄧艾蜀を伐ち、無人の地七百餘里を行くが若き、是なり。

（此兵家之勝「勢」，不可先傳也。）
曹操曰く、傳は猶洩（もれる）のごとし。兵に常勢無し、水に常形無し。敵に臨みて變化す。先に傳う可らず。故に、敵を料すは心に在り、機を察すは目に在り。
李筌曰く、不意に備うこと無し、これを攻めば必ず勝つ。此は兵の要、祕して傳えず。
杜牧曰く、傳は言なり。此の言は上に陳ぶ所。悉く、兵を用い勝を取る策は、固より一定の制に非らず。敵の形を見て、始めて施し為す可し、事に先だちて、言う可らず（言うことができない）。
梅堯臣曰く、敵に臨みて應變し宜を制す。豈に預（あらかじ）め前（さき）にこれを言う可きや。
王晳曰く、夫れ行兵を校計そは、是常法に謂く、機に乘り勝を決める若は、則ち預め傳述す可からず。
張預曰く、上に陳ぶ所の事を言う。乃ち兵家の勝策は、須（すべから）く敵に臨みて宜を制す、以て預め先に傳言す可らず。

（夫未戰而廟算勝者，得算多也；未戰而廟算不勝者，得算少也。多算勝，少算不勝，而況於無算乎！吾以此觀之，勝負見矣。）
曹操曰く、吾が道を以てこれを觀る。
李筌曰く、夫れ戰は、勝を決るは廟堂、然る後に人と利を爭う。凡そ叛（叛乱）を伐ち、遠きを懷（懐柔）し、亡（亡国）を推（推測）し、存（存立）を固め、弱を兼（併合）ね、昧（蒙昧）を攻むは、皆て、物情の出ず所。中外（国の内外）離心せば、商周の師が如きは、是未だ戰はずして廟算して勝を為す。『太一遁甲』が置算の法、六十算已上（以上）に因りて、多算と為す。六十算已下を少算と為す。客が多算にして少算に臨めば、主人が敗れる。客が少算にして多算に臨めば、主人が勝つ。此れ皆て、勝敗見（現）れ易し。
杜牧曰く、廟算は、廟堂の上に計算す。
梅堯臣曰く、多算、故に未だ戰わずして廟謀に先に勝つ。少算、故に未だ戰わずして廟謀に勝たず。是算無かる可らず。
王晳曰く、此れ學者の先に傳う可らずの說に惑うを懼れる。故に、復た〈計〉篇の義を言う。
何氏曰く、計に巧拙有り。成（勝戦）敗（敗戦）に繫る。
張預曰く、古は師を興せい將を命ずに、必ず廟に齋を致し、授くに成算を以てし、然る後にこれを遣す。故に、これを「廟算」と謂う。籌策（ちゅうさく、計略）が深遠なれば、則ち其の計が得る所は多し、故に、未だ戰わずして先に勝つ。謀慮が淺近なれば、則ち其の計が得る所は少し、故に、未だ戰わずして先に負ける。多計は少計に勝つ、其れ計無きは、安んぞ無敗を得んや？故に、曰く、「勝兵とは先に勝ちて後に戰を求む。敗兵とは先に戰いて後に勝を求む」。有計と無計とは、勝負は見（現）れ易し。

了　2017年10月29日